

の薬ッばなど燃やして、煙幕を張って敵機の目標を避けるための、防空演習が、実戦には役立たないと、つくづく感じられました。後で聞いたんですが、那覇爆撃にきた敵機は、艦載機のグラマンとか言っていました。那覇が空襲されたから、こちら辺の方も、恐ろしくなって、壕や墓を利用しての生活に入りました。

大名の駐屯部隊

米子 沖縄には武部隊が、最初に来て、那覇方面に駐屯していたのですが、あとで台湾に移動したそうです。

こちら辺には、上陸一、二か月前頃から、球部隊の一部が駐屯して、現在の公民館附近に茅葺の兵舎がつくられ、民間人の家なども、宿泊に利用してありました。馬場では、軍用犬の訓練、軍馬の調教などをしておりました。

盛吉 はっきり覚えていませんが、私の家は、球部隊所属の衛生隊軍医松田大尉配下の医務室として使用されておりました。

敵が上陸した四月初め頃、松田隊は南風原の方へ移動しました。夕方になると殆んど毎日安謝港の沖合「チービシ」(当時の神山島)の方向から、最初曳光弾が飛んできて、それからはげしい艦砲射撃が開始されました。

その頃からこちら辺の家もあちこち焼かれました。

目前で艦砲が炸裂

私の家族は自宅裏の、よその方の墓を、避難場所としておりました。

からと、承諾されました。そして二十八日も空襲情報が入って欠勤、二十九日は出勤いたしました。

それから段々いくさも日増しに烈しくなり、その頃、浦添ユードンや前田方面では、昼は米軍が夜になると日本軍が攻撃にうつって一進一退の激戦地になっているとの情報がありました。

艦砲射撃の中を避難

米子 それから敵が、浦添経塚まで、攻めてきたとこのことで、経塚の私の里方の、照屋の家族が、私達のいる樋川前の壕に、避難してきたので、五月三日の夕方、近所の宇良、与座さんの家族といっしょに、南部島尻方面へ、避難しようと思って、出発いたしました。

末吉部落へ下りて、現在の松島中校通りの真嘉比街道に出た所で、艦砲射撃の砲弾に会いましたが、幸い不発弾で、怪我人はありませんでした。現在の大道栄町市場附近の一高女前で、経塚の私の父が落伍して、わからなくなりました。私達は、父を待つてはおれず更に前進してそれから国場部落の上の壕に辿りつき、一応そこに二日位落ち着いていましたが、そこも艦砲射撃が激しくて危いので、それから真玉橋を渡って、豊見城嘉数部落の山手の方の丘陵にある、海軍壕に入りました。

盛吉 その壕は奥行が六メートル位でしたが、先に入った民間人もおりました。通信隊が入ってくるのとこのことで、私は安全な場所の壕を捜しに出かけましたが、よそ部落で、地形が詳しくないため、させないので戻ってきました。私の隣近所の五家族が一週間位ここにいたと覚えておりました。

た。当日は嫁いだ長女、二女の二人の姉と両親、親戚の稲福さんに、私も同じ墓に、隣家の宇良の婆さんが、並びの墓に避難しておりました。

たしか三月二十三日と記憶していますが、当日も空襲があったので、私も部隊勤務を休んでいました。夕食をすまして間もない六時頃だったと思います。突然、艦砲が飛んできて、墓の入口側で破裂して、そこで湯を湧かしていた二番目の姉照屋ツルが、大腿部を撃たれて出血多量で即死、父は破片で右腕を貫通され、母は爆風で目を痛められ、その時隣の墓にいた、宇良の婆さんも負傷して翌日死亡しました。

母は十三年前に老衰で亡くなりましたがいつも頭痛を訴えておりましたから、当時の後遺症も原因したようにおもわれます。

米子 その日、私と一番上の姉の娘与座明子(現在姪百合の塔へ祀られている)と二人は樋川前の壕にいました。そこは岩石の自然壕で、水も近くにあつて、墓の方より広くもありますし、隣り近所の方も多くていくらか安心だったんです。

二番目の姉さんが即死された日を、主人は三月二十三日と言っておりますが、姉さんの命日は四月二十四日と覚えております。

盛吉 その日は、墓の真中に座しておりましたが、中まで砲弾の破片は飛んできましたが、負傷もしないで、運良く助かりました。

十月十日の那覇の大空襲後、部隊は津嘉山の壕へ移動しておりましたので、津嘉山の壕へ四月二十六日に行つて、家族の被災状況や、家内も妊娠中で、お産前だからとの事情を、軍の経理部長に報告いたしましたら、部長もできるだけ都合の良いように取計います

山羊料理

その頃私の両親は、負傷していたので、末吉社壇毛にある、自分等の墓の近くの壕に避難させて、私の兄嫁が看護していました。自宅が医務室だった時の衛生兵が社壇の壕におりましたし、又兄嫁も従軍看護婦でしたので両親の傷の手当も頼んでおりました。

五月九日、戦況情報が良かったので、両親の見舞をかねて、近所のおばさんといっしょに、大名町の自宅に行つて一晩泊りました。

飼育していた山羊が、一頭末だ生き残っていましたので、ふと思いついて殺し、両親にもやつて、それから近所のおばさんといっしょに、豊見城の壕へ戻り、山羊肉を持ってきたと言ったら、みんな喜んで、食べないうちから元気づいて、今までの沈んでいた顔も笑顔に変わり、久し振りに笑い声を聞きました。

それから、安全な壕も捜せないで、一応自分の所属する部隊を頼つて、南風原津嘉山の壕へ行きましたら、司令部本部付の、奥原さんに会いました。

奥原さんは、彼の家族は、識名部落の方に避難させてあるが、明日識名に行つてつれてくる予定だから、軍が使用しているこの壕に入れて貰えなかったなら、私と二人で、こちら辺に壕掘りしようと言ったので、私はまた、豊見城の海軍壕へ戻りました。

米子 私達は五月十一日、海軍壕から出て、津嘉山の壕へ向つて出発しました。

途中で私の姉の前原の語では、私の父の友達金良長堂にいる、このことを、以前聞いた覚えがあるから、ひよっとしたら父は金良部落あたりに行つてるかもしれないとこのことで、そこへ向つて歩きま

した。

そしたら姉が言った通り、金良で父を見つけて、姉の前原、親子四人は、父といっしょになって、金良部落の方に泊まりました。

至近弾が破裂

盛吉 私達は金良部落を夜明け前に出発して現在の南部農林高校近くの小さい橋を渡って、津嘉山部落に入りましたが午前六時頃だったと思います。突然歩いているところへ爆弾が飛んできて破裂して、私の一番上の姉と、自宅隣りの幸地のおばさんが即死、私も背中と左足踵に破片が入りこみ、明子も右腕に軽傷を負いました。米子 私は幸い、砲弾破片が側の大きなガシマルの木の枝にさえぎられたため、左手に軽擦過傷でした。

盛吉 そこから軍の壕も近かったので、壕の中にある医務室へ、直ぐ行って、手当てを受けました。医務室関係者の方も、知っておりましたので、心やすく治療を受けることができました。そして前日会った、奥原さんの寝室で、一時休ませてもらい、それから、いところの照屋春子とつれの幸地よし子さん等に、経理部に饅頭の空箱がありましたので、運ぶのを手伝ってもらって、それを利用してわか作りの寝台で休ませてもらいました。奥原さんの家族を、いっしょに行つて連れてくるとの約束も私が負傷したため、彼は別の友人と、出かけて夕方家族を連れてきておりました。

民間人は軍の使用する壕には入れないようになっていたが奥原さんが司令部付で、私も経理部で働いていましたので助かりました。

対話を聞いておりましたが、先生の言うには、女子や年より子供など、非戦闘員には、敵もなんにもしないはずだから、少捕虜々になりなさい、と話しておりました。

兵隊の出入りは、壕の中で、寝ていてもわかりました。夕方になると、百名ぐらい、戦闘に出かけて、四時間ぐらいいてから、目を撃たれたり足を引摺り、びっこになって帰ってくる者など、負傷者と、合わせて五十名ぐらいしか帰ってきませんでした。

負傷しながらの避難

盛吉 それから私達は、五月二十八日頃、兼城村武富、波平部落へ向つて津嘉山壕から、昼は敵の攻撃がはげしいので、夕方出発しました。私は足を怪我して、歩くのが、困難でしたので、いとこの春子と、幸地のおじさん等が交代で、モッコでかついでくれて、時どき杖をついて歩きました。

米子 赤子の勝子は、生後十三日ぐらいしかたっていないので、私の母が抱いていました。そして、武富部落に辿りついて、馬小屋で、一日過しました。

そこで偶然、私達同部落の名嘉山、玉寄、福地さん等三家族と、いっしょになり、連れが増えましたので、いくらか気休めになりました。

盛吉 食糧は敵機のこない時、元気な方達が畑に行つて、芋やキャベツ、きび等、とってきて、米も少し持っていましたので、飢えを凌ぐことは出来ました。

それから翌日、武富から保栄茂部落へ下りて糸満照屋部落の方へ

陸軍壕でお座

津嘉山の壕に避難して三日目の五月十五日に、長女の勝子が生まれました。

経理部長にも、家内がお産した場合のことを頼んでありましたが、部長自らの寝まきを、あかごの肌着やおむつ等に軍属として働いている女の子等に縫わせて、別にお金五円をお祝として頂いたこと等いまでも忘れません。

約十七日位そこで過したと思っています。

米子 津嘉山の壕は三十七か所も洞穴があって広びろとしておりました。陸軍病院は、南風原兼城部落、学校のある所で、津嘉山の壕には、球部隊の医務室がありました。

私達が津嘉山壕に留つてうちに、球部隊全部もいっしょに鳥尻へ移動しました。

盛吉 球部隊が移動したのが、五月二十五日でした。経理部長が引揚げる時、我々といっしょに行けなかったら、壕の中に、食糧罐詰類、毛布や衣服も沢山あるから、使ったらよいでしょうと、言われましたが、二十六日頃、石部隊が入ってきて、私達に出ていくように、言われました。姉の娘明子は、従軍看護婦として、部隊といっしょに、行動するため、軍についていきました。

牛島中将も、首里城の司令部が、危なくなったとこのことで、五月二十五日の夕方、この壕に立ち寄られてから、摩文仁方面へ移動されました。

米子 私が津嘉山壕にいる時、石部隊所属の浦添小学校の先生だったか、はっきりわかりませんが、私が寝ている側で、姉の春子との

向つて歩きました。

その日は敵機がこない様子でしたので、昼間出発したら、台南製糖高橋工場附近の十字路で、敵の偵察機(トンボ型)が旋回しておりましたが、間もなく、榴散弾爆撃を受け、上空で花火のように、二、三回破裂しているようでした。

私はその時、足を引摺りながら、物陰を捜して待避するのに大変でした。

何時なんどき飛んでくるかもしれない、艦砲射撃の砲弾や、空から降ってくる爆弾にやられやせぬかと、部落につくまで、いつも不安でした。

やっと照屋部落につきましたが、そこでも馬小屋みたいな処におりました。

その日は艦砲射撃が烈しくて、至近弾が飛んできましたが、幸い負傷者はでませんでした。破裂直後の爆薬の臭いこと、未だ鼻の中に、しみついた感じがいたします。

米子 それから糸満へ行つて、壕も捜せないで、空家に避難、そこで一泊して、翌日名城部落の方へ向つて移動しました。

米軍の猛爆を受けて少捕虜

盛吉 名城部落に行つてからも、壕が捜せないで、松の木の根っこや、海辺のアダンの茂みなどに隠れて避難しておりました。

その頃、私達の周囲は、敵に追いつめられた友軍の兵隊があちこちたむろして、敗残兵として、避難民同様に、逃げかくれしていました。六月十八日だったか、私達は、浜辺に近い松林の蔭に、ひ

そんでいましたが、周囲は敵にとりかこまれていましたので、捕虜になろうと、出て行く処を、後から友軍の兵隊が「出て行ったら、打ち殺すぞう」と大きな声で、怒喝られて、またもとの場所へ引返しました。

それから避難場所を、海辺の、アダンの茂み側の地下壕へ、移りました。その近くに同部落の、名嘉山さん他二家族の方が、同じくアダンの茂みにかくれるように、並んで避難していました。その頃から、私達は敗戦を察知、殆んど避難民が、ひそひそ話で、語っていました。どうせ犬死するよりは捕虜になった方が、或は生き延びるかも知れませんが、私もそう考えるようになっておりました。

六月十九日朝十時頃でした。家内の母が、赤ん坊を抱いたまま、顔面を撃たれて即死、不思議にも、赤ちゃんは助かりました。たぶん、赤子をかばうため、体を伏せることができなかつたかも知れません。

米子 母はふだんは、毛布を身にまとい、出歩きもしないのに、その日に限って、朝も早くおきて、壕から出ておりました。赤ちゃんの勝子は助かっていますから、やっぱり、運命だったんだと、諦めています。

盛吉 その頃、敵は私達が前の日いた場所附近に猛攻撃していました。耳をつんざく弾丸の炸裂音、松の木も、へし倒されて、白煙が、たなびいていました。私達も、そこにいたらおそろく死んでいたかも知れません。友軍の兵隊たちは、殆んど死んだと思います。

米子 六月十九日が私の母の命日ですから、その翌日、六月二十日

して、山原の福山部落に移動になりました。

戦傷者の収容所生活

盛吉 越来の収容所へついでから、私が食糧捜しに、部落のはずれを、杖をついて歩いて、疲れてひと休みしているところ、偶然隣り部落の首里末吉町の顔見知りの女の方と出会いました。彼女は、私がびっこで歩くのになんぎそいな様子を見て、彼女のつれの方と二人に私はモッコでかつがれて、部落までつれていかれました。

部落についてから、彼女が芋を持ってきてくれました。私も二、三日ろくに食べてないので、あの時のうまさ、いまでも忘れられません。

怪我はしているし、腹はすいてるので、その時は乞食同様な生活で恥かしいとか、言った気持はおこりませんでした。

彼女達は、私等より先に捕虜々になって、この部落に到着き、班単位で作業をして、芋掘り等も班でやり食糧は腹いっぱい、食べられていたそうです。

それから三、四日過ぎた頃、私が杖を片手に持って休んでる所へ見知らぬ、びっこの若い男が、近寄ってきて、話かけてきました。彼は内地人の兵隊で、本名は千田重美だが偽名を使って、大城重次として、捕虜々になったそうです。

当時兵隊や、郷土出身の防衛隊等は、殆んど屋敷収容所に収容されて、ハワイに連れられていかれたそうです。

後で本土召集の兵隊が、帰還できるようになったので、申し出て屋敷収容所に移動しましたが、現在本土で養豚業を営んで、元気

に、私達は全員捕虜々になりました。

捕虜々になるため、真先に出て行ったのが、名嘉山さんでした。竹ぎれに、白いタオルをくくって、降参旗のつもりだったんでしよう。そして種一本つけて、当時、二歳の娘恵子をおんぶして、四歳になった恵美子の手を引いて、捕えられた姿は、今でも忘れられません。―それから、私達もつづいて、近くにいた避難民が、続々と、捕虜々となりました。

盛吉 それから、私達は、部落近くで、車にぎっしり詰められて、乗せられました。乗車する時、家内は、赤子を抱いてるので、乗り遅れて、黒人が、車のフェイндаーに指差して、そこに乗れ、と言われ乗りかかっている処を見つけて「そこに乗ったら危い、落ちて死ぬぞ」と言って、降して車の中に、押しこんで乗せました。

集結所の地名は、覚えていませんが、豊見城から糸満に向って左側の部落でした。

一応そこで、女と子供はいっしょにして、男と女、別々に分かれ家内はその晩、車に乗せられ、私は翌日、越来の収容所に運ばれました。

米子 晩から雨が土砂降り、車の中でも、濡れどおしでした。収容所いくまでは、晴れたり降ったりの天気、晴れると、焼きつくような、六月の太陽に照りつけられ、生後一か月余りの、赤ん坊の勝子は収容所へついでから、着がえの時わかりましたが、皮膚が赤くむけて、とても可哀相でした。

私が収容された場所は、今のコザ市の島袋で、そこで約一か月過

過されていると、年賀状も送ってきます。

そして、彼の言うには、私も怪我してみんなといっしょに、作業も出られないし、他に那桐出身の方で、儀保さんという方がおりますが、三名いっしょになつてくれませんか、とのことでしたので、私も承諾して、三人で食糧がしに、出かけたついで、同じき同様な共同生活に入りました。びっこで足を引ずりながら杖をついて、食糧がすの、たいへんでした。

畑に行っても野菜は見つかりませんので、丘の岩間に生えた、チフア葉の茎等、取ってきて、塩もないので、畑でやっと思つて掘ってきた小さな芋を、水煮して、その甘い汁で味つけをして、食べて飢えをしのいでいました。

米の配給は、二、三日に一回茶碗一杯分ぐらいしかありませんでした。

その頃、大城君がなれない野生の植物等食べたせいか、胃腸をこわして下痢をして、痩せ衰えましたので、同じ仲間の苦しんでいるのを、見捨てるわけにもいきませんので、私と儀保君と二人分のわずかな配給米を二人は食べた。いはんも我慢して、彼に、おかゆを炊いて食べさせておりました。

大城さんを、他の班の方に頼んで、医務室に治療を受けさせに行きましたが、怪我人が多くて受付を断られて、診てもらえなかつたと言つて帰ってきましたので、私は下痢患者を甘く見ている医務室の態度に憤慨いたしました。

その頃、他の班のおばさんが豆腐一丁と、班で掘った芋だといつて、一杯持つてきてくれたことなど、只感謝の気持でいっぱい

で、いまでもはっきり覚えております。それから私の足の傷も、大城さんより先に良くなり、やっと歩けるようになりましたから、班長に申し出て作業に行くことになりました。

作業と言ってもそうきつい仕事ではありません。被服類、食糧糧類、梱包された物資の整理や、下水掃除、草刈り等と、きまっています。

そういううち、大城君も元気をとりもどし、働けるようになりましたので、班には私の名前前でカードをつくって、大城君と二、三日交代で、作業に通っていました。

仕事場は、屋原バス停留所前のライカムでした。私も大城君も、作業に通ってからは、ときどきかん詰類も食べられて、二人共体の調子もよくなり、日増しに元気がでてきました。

その頃、軍需物資を失敬してくることを「戦果」をあげてきたと言って、当時のはやり言葉みたいになっておりました。

従兄と再会

それから従兄が、越来の孤児院で先生をしていることを、私の知人から偶然に聞いて、私は孤児院をたずねて、いとこの兄さんと会いました。

従兄さんとも、敵が上陸する前から会ってなかったので、私の突然の訪問で、びっくりされていました。

そして敵が上陸してからの、家族や自分達の行動などを語らい、私も足をちんばにされながらも、お互いに、無事で今日まで生きながらえてきたことを喜びました。

糧がしに來たと行って、読谷方面へ向って歩いているのに偶然会ったという知人の話を聞いて義父が近くにいることも知り、あちこち尋ねてやっと父の居所がわかりました。

そして私の宿につれてきて、従兄の兄さんに頼んで、孤児院の作業人として、働くことになりました。

家族の消息

米子 末吉社壇の壕で兄嫁や知りあいの衛生兵に、傷の手当等看護を依頼してそのまま別れた両親の中、母は捕虜々となって、山原の福山収容所でいっしょになりましたが、母の言うには「父は糸満近くの照屋部落で避難先の民間人の壕で爆風で死亡、窒息死だったのか無傷だった」そうです。

その時私達同部落の方が二、三家族やられ端々覽さん家族は逃げようとするところを、後から敵に撃たれたとのこと。

同部落の方が、終戦後首里に移動になってからの話ですが、照屋部落に入る前、私達の両親も、私達が歩いているのも後から見たと話していました。

照屋部落では、父母の避難先と、私達がいた場所と、僅かしか離れていなかったと、後で聞いたんですが、何しろ敵に追われて逃げ隠れするのが、せいっぱいですから。

それから、私の父や主人が、孤児院で働いていることを、誰かの連絡で知り、私は母より先に、越来の主人のところへ、山原福山から、移動して、その時は、儀保さんとか言われた方は引越して、本土の方の大城さんはいました。

それから、親姉妹や、親族の方が、戦争の犠牲者になったことを話したら、兄さんも、涙ぐんでおりました。

次に仕事の話にうつりまして、私は現在軍作業で、ライカムで働いていますが、足がびつこのため一寸こたえます、と言いましたら、それでは「こちらで、働きなさい」とのことでしたので、私も従兄さんと会ってよかったと喜んで、収容所に帰りました。

大城さんにも、私が孤児院で働くようになったことを話したら、彼も喜んでくれました。彼は軍作業で働きながら、本土へ帰れる日を待って、仕事場がかわっても自分の間、同居生活は続けることにしました。そして私は、翌々日から軍作業をやめて孤児院に通いました。

孤児院では、人事関係の事務を執るようになるとのこと、早速その日から仕事に就きました。孤児院長は、渡嘉敷さんと言われ、いとこの兄さんは、学校の先生をして働いていました。孤児院と学校はいっしょだったそうです。孤児と学童合わせて六百名位だと従兄さんが話しておりました。

それから孤児院には、軍需物資のスポイル品といって、軍から持ってきた糧詰類も沢山ありました。

私達にも、ときどきおす分けして貰いましたので、夕食のカロリーも良くなり、収容所へきた当時、乞食同様な生活をしている頃の瘦せ衰えた顔に、見覚えのある方に勤務中どもの調査で行った時にあいましたら、「大山さん、だいぶん、りましたねー」と笑いながら、挨拶されたことを今でも覚えております。

それから、豊見城の金良部落で別れた、家内の父が、山原から食

私が行って暫らくして、大城さんらも内地帰還ができるようになったので、屋嘉収容所へ移動されました。

それから九月頃だったか、山原の福山から母をつれてきました。

首里移動

盛吉 越来収容所で約六か月位してから、首里へ移動になり、現在の鳥堀町クラブ付近で、軍払下げの天幕を使用して、生活しておりました。

当時は全く、テント村ばかりでした。

それから次第に、民政府工務課からの、規格住宅の材木の配給を受けて、あちこちに茅葺の家が建てられました。

そして私は、軍の自動車修理工場で働いたり、石川の東隠納にあるモータープールや、石川のミシン工場で働いたりしました。

工務課に勤めている時は、軍から払い下げて貰った資材を、各地の規格住宅建設のために運搬する仕事でした。工務課の倉庫内で宿泊したり、運搬用の車で、首里から石川まで通ったりしました。

開商売

その頃、軍作業員に対しては、送迎用トラックがありましたが、一般の人が利用する乗物がなかったため、部品をかき集めてきて自動車を組み立ててそれで闇の乗合バスとすることがはやっていました。

私も自動車の構造については知識があったので、助手をひとり雇って、一年半で三台も作り上げました。

一台は現在の首里高校裏、二台は、軍のチリ捨て場になっていた

機保の西森で組立てました。

自動車の部品は、普天間を初め各地の日本軍の壕の中から、壊された日本軍車輛の使えそうな部分を取りはずして、各部品を集めるのですが、それは大仕事でした。溶接機があるはずもなく、ひとつの部品を取りはずすのに二人掛りで、二、三日費すこともありま

た。一台が完成すると、早速、後部にハシゴをかけて乗合バスとして走らせました。

主に石川—コザの間を走らせましたが、一日二、三千円以上の収入がありました。その間にも各地から部品を捜しては、次々自動車

を組立てていったのです。しかし、あくまでも闇行為でありますので、警官にみつかると罰金、二、三百円課せられたり、罰教されたりするので、この仕事もやめてしまいました。四六、七年頃のことでした。

首里先発隊

首里市大名 粟 国 ヨ シ (二五歳)

配給の停止

当時首里には兵隊が駐屯していて、大名にも石部隊の兵隊がいて兵舎もあり又その兵舎だけでは収容出来ずにあちこちの民家に分散して入っていました。一軒あたり五〜六名のわりで、家の持主と同居という形でした。

時に兵隊さんと一緒に石を運んだりモッコをかついだりして働きました。その頃は、男は皆兵隊にとられたり徴用でどこかに行かされたりしていなかったので、女が主になって、力仕事などもやりま

した。私も二五歳の働きざかりで主人、私の母、一歳になる長女の四人家族でしたが、主人は那覇の久茂地にある軍の工場で働いていました。主人は支那事変の時に目をやられて、当時は傷い軍人でしたから、本来なら召集もなかったのですが、やっぱり時が時だったので、ようやく現地召集され、白石中尉の部下として、軍に供出する菓子を作る工場に行っていたのです。

私は乳飲み子をかかえていましたが、毎日軍の作業に出ました。主に爆作りの時のモッコで土はこびでした。内間、赤田、沢岬、末吉宮の壕にも行って働き、あい間をみては乳を飲ましに帰って、又でかけるといった具合でした。又壕の中に入れる木材として伐採してあった松の木の皮をはぐ仕事もしました。

こうして皆懸命に働いて軍に協力しているのですが、友軍は沖縄の人をばかにして「どんな協力をしているのか」などと云ったりしていました。

私は少しは教育も受けていたし、年も若く、云いたい事ははっきりいう性格だったので、デパートの店員をしていて話し上手な人、学校の成績がいつも一番だった人と一緒になって三人で友軍の兵隊につっかかっていって、やつつけていましたが、又親しくもありません。

私の家は三部屋しかなく、兵隊さん達が住むにはせますぎるという事で、石部隊の食糧置場として使われていました。私の家から道を隔てた向いが井戸になっていたので、家が友軍の炊事場になり、そこは誰れもが素通り出来る様になっていました。

兵隊さん達はいつもお腹をすかして、朝食など作っている間中、そばでじっと待っているという風でした。私達自身お腹がすいているのをがまんして、まずは兵隊さんと食べてもらいました。沖縄の人間は情にあついといわれている言葉どおり何くれとなく面倒をみました。

当時は軍に協力しない者は「非国民」と云われ人に後指をさされる時代でもあり皆いろいろの形で協力したものです。まず食糧では無理をして切り干しいもを供出しました。供出する事によって特配区域になれるというので、喜んで出したのですが、結果は切り干しいもが出せる位も食糧があるのなら農家だと云われ、配給がストップされました。私の家は四〇〇坪位の畑があったので、少しは供出しないと今まであった配給が停止になると聞いて正直に自分達の食べるのをしまつしてやっと供出したと思ったら、こんな目があったのです。それから配給もなく食糧には困りましたが、ヤミ米を何とか手に入れて食べていました。

徴用のあい間に授乳

徴用としては、大名は以前から馬場でしたのでその為道は雨天の時はドロドロにぬかるんでいて、これでは駄目だから石をひいて道を作れと軍から命令され、墓をこわして道を作ったのですが、その

ヤミの食糧品

だんだん食糧難になって、石嶺あたりにヤミで肉なども売ってかれるところがあるというのを人づてに聞くと、朝早くから出掛ける一日がかりになってでも買ってきたものです。どこから来るのか知らないのですが、肥おけに肉や米などを入れてもって来ては売るヤミ商売も大いに利用されていました。食物だけでなく衣類などもなかなか手に入りました。私も赤ん坊のおしめなど自分の着物をつぶして作り、他のものもいろいろ工夫して作っていましたが、衣料品類にはずいぶん困りました。

首里には兵隊が沢山いたので、それにともなって、ピーヤーといって朝鮮人慰安婦達が本土から送られて来て、平良、赤平あたりに軍が民家を借りて住まわせていました。

十・十空襲

十・十空襲の時には昼すぎだったと思いますが、安謝にある大きな工場が爆撃され、その様子ももっとよく見えるところに行こうとして歩いていたらところに爆風がきました。立っておれず伏せなくてはならない程に強いものでした。那覇がひどくやられていて久茂地の軍工場で働いている主人の事が、心配でした。私の家のあたりは、直接攻撃はありませんでしたが、母と赤ん坊は壕の中に入れ、私はあたりを見回ったりしていました。隣の家に破片が飛んできて火事になったので、この空襲で学校から帰えされてきた近所の子供達二〜三人と一緒にあって、水をかけました。

その時はひでりで水が少なく、井戸の水は日本軍が使うのでその

水も使えず、私の家にあひるをかっていたので、その為にためてあった台所排水（ミクタンナシー）を使いました。

私も主人の事が気になって、見に行こうとしたら那覇の人達が、首里に向って沢山上つてきているのにあいました。那覇は相当やられていて皆続々と疎開しに来ていました。心配していました主人も「会社（軍の工場）の壕に入っていたが、もう少しで死ぬところだった」といって帰って来ていました。那覇が爆撃されて、それでますます食べ物もなくなり、自給自足の様にして暮らしていました。

日本軍は私達に「敵を沖繩におびきよせ、日本本土からも応援を求め敵を袋のねずみの様な状態におとし入れ、やつつけるのだ」と云っていましたし、私達もそれを信じていました。

墓が弾薬庫

十・十空襲があつてからは、いつも灯下管制をしていました。空襲があると壕に入って、そのまま壕で一夜を明かすという様な毎日でした。近くにある大きな墓や自分達の墓を壕として入っていました。大名にある墓という墓は全部あけられ、中の骨つぼは一まとめにしておき友軍の弾薬や食糧が入れてありました。このあたりは墓も多かったのですが、骨つぼを動かさない墓はなく、人が壕がわりにしているか、倉庫がわりに使っているかのどちらかでした。

爆撃されていつ家がやけるか分らないので大切なものは家の外に出してあつて、家の中はカラッポで壕の中に避難していました。空襲が激しくなると皆「もう大変だ」といって壕の中にじっとして外にも出なかつたのですが、私はじっとしておれない性分でもあり、

のを見るにつけ本当に可哀相でした。大名は昔から馬場でしたが、戦争になってからも日本軍の馬が、飼われてあつたのですが、その馬でも弾にやられるとヒーン、ヒーンともの悲しい鳴き声をたてて助けを求めてそばによつて来られた経験もあります。

米軍が北谷あたりに上陸してからは、夕方になると読谷あたりで花火の様にボンボンあがっている、艦砲射撃がみえました。敵はもう近くまできているとは聞いていても、毎日の生活におわれて、目でみないかぎりどこでどうなっているのか、はっきり分りませんでした。もうその時は戦況の悪化で、工場にも行かなくなつた主人も一緒に避難していました。

低空飛行のトトンボクへ投石

トトンボ（偵察機の事を一般にはこう云われていた）が私の家あたりにもものすごく低空飛行して来た時には、袖なしのランニングをつけた二人の米兵が私達をみてケラケラ笑っている表情まではっきり見えました。二人の青年が生意気な奴め、コンチクショーといつて飛行機めがけて石を投げつけました。

その青年は、日本軍の本部付けになっていたが、戦争の悪化で逃げて帰ってきた兼助兄さんと那覇から帰っていた盛ユウさんでした。二人は、私の家のみかん木の下から投げたのですが、もちろん届くはずはありませんでした。私も「こんな事して後で大変さ」とは云いましたがそのまま壕に入って、翌日出てみたら、あたり一面にガソリンをひっかけられて家から木から皆焼きつくされていまし

母と子供の食糧を何とかしないといけない事もあり、日中はじっと壕にいる事もなく、ほうぼう出歩いていました。それでいろいろの事を見聞きする事も多かつたのです。

下級の兵隊達

大名にいた兵隊さん達の本部は第三小学校（今の実務学園）のあたりであつて、兵隊さんが毎日弾薬や食糧の入っている墓などを見まわる様になつていたので、その役目にあつた兵隊の中には爆撃が激しい中を見まわる勇氣がなく、途中で戻つたりする兵隊もいるらしくそれを又監視する上官がいました。見まわりしないで戻つたといつてまだ子供みたいな若い上官になぐり倒されているのを見ました。上官の云う事を聞かなかつたといつては並ばされて、顔などをはり倒される様子を見るにつけ、人は「お国の為」というけれど、こんなみじめな目にあわされているのかと、とても可哀相でした。

又慰問袋が届くと兵隊さん達は、上官に一応見せてからしか食べられないし、三分の一ぐらいしか本人には渡らなかつたのです。兵隊さん達は、いつもひもじい思いをしていて、お金を出してヤミでやつとの思いをして買った黒砂糖を、隊にもち帰つて上官にみつかると大変だとあちこちに隠しまわつて、少しづつ取り出しては食べたりしている人もありました。あの時はいつどうなるか分らない状態で、お金の値打もなく物が大切な時代でしたが、どんな時代にせよ同じ兵隊の身でありながら、階級が上だと食物にも困らず、どこにいてもお腹一杯食べれるのに、下の人はいつもガツガツしている

た。このあたりは緑でおおわれて逃げ場所も多かつたのがまったくの焼野が原になつてしまいました。

首里立退命令

米軍の上陸後は攻撃も激しくなる一方で、友軍から「敵はもうこの辺の近くに来ていからここから立ち退きなさい」と命令が出され、次々と首里から立ち去つていく人も多くなりました。今の時代と違って昔は、沖繩内でもあちこちに行く事もなく、せいぜい首里から那覇に芝屑を餽に行く程度だったので、地理には詳しくなく「どうしたらいいのかね」と途方にくれましたが、そうかと云つてここにもとどまれないので、近所の親しくしていた人に「一足先に行つてからね、生きておれたら又いつの日にか会いましょうね」といって手をとり別れのあいさつも済ましました。もうその時にはすでに隣りのおじさんが、爆弾でやられて亡くなり皆でたこつぽに入

れ、葬っていました。生れ故郷の大名を後にしたのは四月の末頃だつたと思います。赤ちゃんを背中におぶり持てるだけの荷物を持ち、主人、母と一緒に家の近くの末吉宮から下つて、マカンジャーラ（真嘉比）に着いた頃は、口が暮れてきたので、その日はマカンジャーラあたりのあき墓をさがして入り一泊しました。雨が降つて、ビシヨ、ビシヨの上、背中の赤ん坊は、ぐずつき乳も飲まなくなるし大変でしたが、識名めがして歩きました。識名には、同じ部落の人も沢山いてい

なくなり、泣くばかりでどうしようかと思っている時でしたが、「こっちはもうこんな一杯人が入っていてどうにもならないから後から来た人は出ていってほしい」と云われやむなくそこを出て、今度は小さな墓をあげて入り、そこでも二三日過したいと思ったら今度は、前に追出された壕は大きくてがんじょうな墓だったのを目をつけた日本兵がそこを立ち退く様にと命令し、そこを立ち退いた人達が入るのに使うという事で、結局は、私達が出るはめになってしまいました。弾はほとんどおちてくるし、今度はどこに行けばいいかと考えましたが、私もどこか行って行くあてもなし、主人は長い間の大坂暮しでその後は兵隊にとられほうほうにいつていたので、沖繩に詳しくなく困りました。だがどうせ死ぬなら、こんな知らない人の墓で死ぬより自分達のお墓で死ぬ方がいいという事になり、又首里の方に戻ったら、途中友軍の兵隊から「もう首里は激戦地になっていて、道も破壊され歩ける様な状態でないから戻りなさい」と云われ戻されてしまいました。又壕をさがして歩きまわらななくてはならず、歩き疲れて入った墓には、中に入れてある棺からの臭いでとてもきかかったのですが、次の壕をさがして入る元氣もなくもうどこでもいいからと棺を外に出ただけで、眠りました。

親友の死

その翌日の事でしたが、前に私達が入っていた墓が直撃にあい七々八名は下敷になったままで後の人達も黄燐弾にやられて死んでいたり、虫の息になっている、とその壕に入っていた人が知らせにきました。知りあいの沢山いたので、あわててかけつけたところそ

ブンブンたかっているのを目をつぶり、息をのみこんで、ようやくの思いで通りました。

雨中の壕追い出し

夜はいつも照明弾が上っていましたので、その明りを利用して「ああ、こっちは道がある」といった具合にして進んでいきました。子供をおぶり、母の手をひき、荷物をもった私達ですから、思う様には進めませんでした、具志頭にきて、そこでは具志頭郵便局の壕に入りました。こっちでも二三日位入っていたと思ったら友軍の兵隊が来て「日本が勝つためには皆さんに協力願わねば」とその壕のあけわたしを云われました。出された時は日も暮れ、雨も降っていたので困り、大名で近所だった玉那覇のお母さんや次男が、近くの壕に入っていたのでその壕に行つて、入れてほしいとたのみましたが、子供づれは嫌がられて、ことわられました。壕をみついても「こっちに入りなさい」といつてくれる人は誰一人としてなく唯もう自分さえよければ、という態度ばかりでした。しかたなく又どこかのお墓をあげてかめを一まとめに出しそこに入り眠るといつた連続でした。もうその頃からは食糧にも困りだしていました。それまでは米は友軍が貯えてあった米を安全な場所に運ぶ仕事をすると報酬としてもらえたので、その時も買ったものを持っていました。また、芋、豆、それに知らなかったキャベツなどもあり、それを日が暮れたいつとき攻撃もやみ静かになるのでその時をみはかかって、みぞの中（アモシ）に身をかくし、煙がたない竹を使って、炊いていました。主人、母、子供は壕の中に入れておいて、私

の中には、私が妹の様にして仲良くしていた又吉のシズさんが半身を黄燐弾でやられ身動きも出来ず苦しんでいました。シズさんは私を見て「姉さんと一緒に壕にいつていたら、こんな目に会わずに済んだのに」といつていました。私より三つ年下で「姉さんと一緒に、どこにでも行くよ」とかわいいう事をいつていたのに、若々しく元氣だったシズさんが、こんな変りはてた姿になっているのを見ると悲しくて何ともいえない氣持でした。シズさんのお父さんも即死だったので、そのお父さんが持つていたお金を私に渡し、半分は私に後の半分は私のいとこでシズさんの兄さんと結婚の約束が出来ていた知念のツル子に渡ししてほしいとたのまれたが「私だつてどうせ死ぬんだから、こうして子供もおぶつて、いつまで逃げられるか分らない身だし、お金があつても何にもならないので、私は預れないから」と云つて、その場において元氣だったシズさんのおばさんに預けました。そこでやられたのは、ほとんどが大名の人でした。ついでこの間までは親しくつきあつていた人達の不幸に直而しても看護さえしてあげる事も出来ませんでした。シズさんからも「姉さん私をこのまま捨てないで、おかゆでも炊いてからどこかへ行つてね」と云っていました。もうその場を離れる時は本当に後髪をひかれる思いでした。

ぬかるみの中をあてもなくさまよい歩きました。どこをどう歩いたのか、何日たつたかも分らずただ歩いていて、疲れたらどこか壕をさがして入つて眠り、又歩くといつた具合でした。

真玉橋に来た時でしたが、橋はこわれていて、そのあたりにはものすごく大きく腹れあがつた死体がごろがっていて、無数のハエが

一人外で食事を作り、運んで皆に食べさせていました。

共同で食糧捜し

逃げる途中一緒になった近所の長堂家の主人は、糸満漁夫だったので力もあり、食糧などがたりするのがとても上手でした。私のところは主人が目が悪かつたので主婦の私が出て、お互いの家族の食糧を一緒にさがしまわりました。

畑から野菜類をとつただけでなく、空家に入って食糧や道具もありました。あの戦乱の中では、生きんが為にはそうする他ありませんでしたし、又そうしてもよいと云われてきました。だから鍋でも何でもその場で使つたものを捨てて、又次の場所ではみつめてくるという風にしてやってきました。

高良では飛行機からの攻撃が激しい中を誰もいない民家から、みそと芋を掘る為のくわをとつてきて、さあ掘ろうとした時に爆撃されたので、あわてて地面にふせたほんの少しの間に爆弾でとばされたのか他の人にもつていかれたのか、せつかく苦勞してさがし出したものが全部なくなっていました。

又ある時でしたが、すでに一歳六か月になっていた子供がカチューユー（かつお節のお汁）が食べたいといふのでかつおをさがしていたら、長堂の主人が「あつた」といつて持つて来てくれたのをよく見ると、人間の肉片の様でした。橋の下から持つてきたので間違いないと思ひあわてて捨てました。

戦場の日本兵

島尻に下るときからは、戦闘も激しくなる一方で、食糧を持ち、つえをつけて夜のぬかるみ道を雨にぬれながら下っていくのですが、戦死した兵隊さんが、足もとにくろぐろと横たわっているのを尻目にあれも死体だったねこれも死体だねと、お互無言のまま顔だけうなづきあいました。

両手、両足をもぎとられて、お尻だけでいざっていた兵隊さんも見ましたが、何か与えて勇気づけたいと思っても自分の食べ物もない状態でそのまま通りすぎました。こうして下っている間でも友軍の兵隊さんに親切にされたり、優しい言葉かけられたりすると、いつも壕をおい出しに来るにくりしい兵隊でも個人、個人は案外優しい人も多いのかもしれないと思いました。そんな兵隊さんも集団になったり又軍の命令をおしつけてくる時には私達にはとてもおそろしい人間にみえるのです。

私は若かったからかもしれませんが、ほしくてもなかなか手に入らない貴重品のマッチや兵隊さん達が靴下に米を五合位も入れて持ち歩いてるのを「どうせ私達兵隊は戦死するのだし、持っていてもしかたないから奥さんにあげましよう」といっては何度かもらいましたし、兵隊の中でも偉い人だと思えますが「奥さん御苦労さんですね、もうすぐ終わりますからね。後少しのしんぼうですよ」と励ましました。

飛行機からの攻撃などは一機、二機どころではなく一〇機も二〇機もがブンブン飛んで来て爆弾を落すので大変でしたが、私には飛行機からの爆撃よりもいつどこからくるか分からない迫撃砲がおそろしい存在でした。

が友軍の兵隊なのかしらと思いました。何もかもなくなってしまうからあの人は、本当にわけの分らない子供達より始末におえない存在でした。

いろいろな目に会いながらも何とか壕や壕に入れた内はよかったです、それもまったくなくなり民家や馬小屋でもいいから入ろうとさがしても、どこもかしこも焼野が原でした。みんなも下って行くにしたがいが壕もなく困っていました。木が残っている森という森には、皆人が避難していました。

袋小路

真壁新垣部落に来た時には、もうどこに行っても戦場だと思うと逃げる気力もなく行くところまで行ったという思いだったので、そこで壕をさがし、とどまる事にしましたが、やはり壕らしきものは皆人が入っていて、私達が入りこむ事も出来ませんでした。岩があったので、持っていたくわでその岩の下に穴をほり、かれたさとうきびの葉を床にし、木でおおいをしただけの簡単な壕を長堂の主人、私、私の主人で作し、私達の家族四名それに長堂の一家と合わせて十名位が入りました。壕というより地面に穴をほっただけのものですが、やっと壕に入れた安心感で、その夜はぐっすり眠り朝起きてみたらそこは、雨水が流れこんで池の様になっていました。身体がビシッビシッぬれているのも気づかずぬまっています。私は死ぬかくはとくく出来ていたので、どんなに爆弾がおちてもものとせず、畑にいては、キャベツや豆をとってきていました。命をつなぎとめる為には他人の物だからとてはいけません。

島尻に下るたびに、生れたところで死んでほおむられたかのように、どうしてこんなところまで来てしまったのだろうかと思っていました。特にあれもない格好で死んでいる女の人を見た時などは、死んでから後もそんな姿を人にさらしてはじをかきたくないとそればかり考えて、自分はそんな目に会わずに死ねるかどうかと不安でした。

子供を大げい連れてくる人は、電波探知機か何かで泣き声をさがられるとか云われて、どこの壕にも入れてもらえませんでした。私達はまだ一人だったので何とか入れてもらええる事もありましたが、中に友軍の兵隊がいる場合は、泣き声がちょっとでもすると叱られるので、とても気を使いました。あの戦争で子を持つ親は二重にも三重にも苦労をして、気のやすまる時とてなく本当に大変でした。

飢えた負傷兵

あちこちの壕には、けがをして助けなくなった兵隊がいて、看護されるでもなく、食糧も与えられず、もうほったらかしにされたままでした。私達が入った壕にもそんな兵隊がいて、私達が食事でもしようものなら近くに来てじっとみるのです。もう今にも死にそうになっていて、その臭さといったらたらまらない位でしたが、飢えて血の気も失せたその兵隊に見られると、ぞっとして居たたまれない気持になり、「私達には子供や年よりがいて食物もこれだけかあげられませんが、この壕にいる間は食物は私が何とかしてきますから、済みませんがこの場からちょっと移って頂けないでしょうか」とたのみました。ひもじい思いをしているのですが、あれ

などという事も余り考えませんでした。私達が入っていた壕の近くにはやはり私達の様に穴の中に入っていた人も多かったのが、井戸に水をくみ出る時など「元気ね」「元気よ」と声をかけあいました。が姿は見えず、どこにいるかは分かりませんでした。

又父親は現地召集されていのかどうか分りませんが、母親一人で五名位も子供を連れていた家族がありました。その中の子供が爆弾にやられて死んだのを、やっこの思いでたこつぽに入ればおむった矢先又別の子供がやられて死んでしまったという事もありました。母親はもう涙もかれはて放心状態でした。こんな事を見るにつけ身につまされて何とも云えない気持になりました。

夫の最後

この真壁新垣部落の壕に入って一週間位たった六月十八日に艦砲射撃をうけ、その直撃弾で主人は死にました。この壕をほる時に主人は「今まで逃げてきたけどこつちが最後だね」と云ったものでした。その言葉通り主人にとってここが最後の場所となりました。

その日は、死ぬ時は身ぎれいにしたいとかねがね心がけてきていたので、しらみがでていた髪を、前日の十七日に洗ってさっぱりし、その日の朝起きて髪をとかしていました。そこにあの直撃をうけたのでした。私は主人をいつも大切にしていたので「外にはなるべく出ない様に」といって、危険な事はほとんど私がやってきていたのに、事もあろうに壕の奥にいた主人が直撃で死に入口の方にいた私は、大げがでしたが生きていますからこの時程皮肉な運命を感じた事はありません。

主人の他に長堂の長男、次男が死に、長堂の主人とおばあさんが大けがをしました。自分の目の前で直撃弾で死んでしまった主人の事がいつも思い出され、今に至るまで何度かあった再婚話も九分通りととのつていても、あの時の主人の姿が目にかんできてどうしても再婚にふみきる事は出来ないのです。まわりの人からは「馬鹿だね」と叱られますが主人の「あえない最期」を見てしまった私には一生忘れ去る事は出来ません。

主人が死んでからは死にたい、死にたいとその事はかり考えていました。ふと気がつくとも私も相当やられているし、抱いている子供の頭から背中から全身血でまっ赤になっていたので子供もやられたと思い、調べて見てもどこかといってけがもしてなくて、私の頭から流れた血でした。子供を殺して私達も死のうとって私の母も手にしたカマを、首のところまで持ってきていました。子供と母をどうしたらいいか分らず、こんな時に手りゅう弾があったら直ぐ死ぬるのにと手りゅう弾がほしいなあと思いました。同じ死ぬなら生れ故郷の首里の方を向いて死のうという事になり、そこを出て上にあがる事になりました。長堂のおばあさんはけがをしていて「私はどうしようね、どうしようね」と云っていたがそのままそこに残されませんでした。私の母も主人の死にショックをうけたのと長い蟻生活で骨と皮になりすっかりやつれて、ふらふらと歩くのがやとでした。私は子供をおぶり、杖をついて中風で歩くのが困難な母の手をとり歩きました。

捕虜

アメリカ艦詰のせいか体格も良くなって別人の様でした。それを見たらはりつめていたものが一度にくずればカバカバしくてしかたありませんでした。

足を引きずりながらの作業

知念の収容所が一杯で入れなくなったので今度は、同じく知念村にある久手堅に入りました。捕虜々になってからは、一世帯に一人の割合で作業に出なくてはならず、母と子供だけの私達の家族では、傷もまだ治らず、ふくれた足をひきずりながらも私が出ました。

作業は家を作る為に必要な木をばっさいしたりかやをかつたりする仕事でした。そのかやをかりに久手堅から三キロも離れた玉城村に行った時は足がはれて痛くなりとうとう肩りは動けなくなりしました。こうして無理してでも働らかないと配給ももらえないのでがんばり通しました。

その他にもほりの仕事や海にいつて、アメリカ兵が船から捨てるメリケン粉（外側はぬれても中の方は使えた）や肉の罐詰を拾いました。アメリカの兵隊は何でもよく捨てたので両手に持ちきれない程もありました。それらは共用のものとして保管され、そこから配給といっけいからかずもらっていました。

恐ろしい米兵

作業に行く時は班長として「赤帽」と呼ばれていた私達のめんどうをみてくれる人が一緒でしたが、アメリカ兵が女達をおいかけま

大けがをして身体には弾の破片が入っていましたが、これで死ぬると思つたので割合と元気でした。上にあがる途中、友軍の兵隊が私の弟として一緒に連れて行ってほしいとたのみました。海軍の兵隊というその人は民間人にみえる様かすりの着物などもつけていました。「ハイ」とも「イエ」とも云わなかったがその人も一緒に上にあがったら直ぐ目の前にアメリカ兵が銃を持って立っていました。けがをしてたんだかつかがれていたアメリカ兵が私をみてパンをくれた。とうとうとも何ともしないで見ていたら、そのアメリカ兵は安心させる為自分が食べて見せたりしていました。そこでハワイの二世と思われる人が日本語で「安全な壕、安全な壕」とトラックを指さして云っていました。ああこれが話に聞いていたスパイというものだなと思ひ。刃物でも持っていたらあのにくらいしい奴を殺して自分も死ぬば少しはお国の為にもなるのだけども思いました。当時はそんなにまでも困るにつくしと思っていました。そこでアメリカ兵にかまればトラックに乗ったのですが、安全な壕と云っているのはきつと生理めの事だと思つていたが、捕虜々として知念に収容されました。その途中でしたが、私はけがをしていたので手当をする為に百名あたりであったアメリカ軍の病院で降ろされる事になり、母や子供と離れた時は、もうどうなるかととてもおそろしい気がしました。テントばりの野戦病院ではけが人は治療を、重病人は入院させられました。私はそこで治療をうけ髪も切られて、知念につれて来られました。そこには母や子供が待っていたので一安心しましたが、知念の収容所で会った近所の名嘉山兼和青年は、もうずっと前に捕虜々になっていて、米兵の帽子をかぶり

わして大変でした。私達は顔にすみや泥をぬっていてもごまかせずに海にいても畑にいてもおいかけてくるので一人では何も行動しませんでした。班長といつても捕虜々の身ですすから何も出来ないで、金や物で女達を自由にしようとするアメリカ兵におびえ通してました。私達の身を守る為につけてくれる男はせいぜい一二人でしたから、どうにもならず、棒をブンブンふっては逃げるよりしかたありませんでした。

その時分でしたが玉城村でいもほり作業をしていた主婦が、黒人兵につかまえられたのを助けようとした人が、その黒人兵に射殺されるという事件がおきていました。

沖縄の女性は何か月の長い間、爆弾の恐怖から逃げ回りやつの思いで解放されたら今度はアメリカ兵から身をまもるのに必死にならなくてはならず、本当に苦勞の連続でした。

敗残兵を弟として偽る

こうして嫌な目には会いましたが、私が作業にでもらう配給とアメリカ兵が投げてくれるタバコを拾ってそれをかつお節と交換したり、長堂の主人が海岸でたこなどを取ってきてくれるので、とうふとかえたりしていたので毎日の食事には困りませんでした。あの当時は食用油などもなかなか手に入らず、モービル（重油）で料理を作っている人もかなりあった位でしたから、それを考えると私はめぐまれた方でした。

着るものは、友軍の兵隊の肌着や洋服などをもらったり、拾ってきたりして、男もの肌着は洗濯しただけでそのまま着け、洋服類は

モンペ等につくり直して着ていました。

私の身体には、直撃弾をうけた時の弾の破片がまだ残っていたので、それをとる為、志喜屋にあった仲間先生の病院に通いました。そこに一緒にいてくれたのが、私の弟と偽って捕虜になった海軍の兵隊さんで、その人もけがをしていました。その人は兵隊である事をかくしてしまいましたので、私の子供にもおじさんと呼ばせ、町内会長や婦人会長の名前も私から聞いておぼえていましたが、いつも自分の身分がばれないかとおそれていた様です。

名前も私の姓を使って、あわぐにですと書いていましたが、沖繩では、あわぐにと書いてあぐにというのですよと教えていました。二日位一緒に通院していましたが、丁度その頃民間人といつわっていた日本軍の少尉がそのうそがばれ制裁にかけられるという事件があり、みせしめの為にかそれを私達にも見せていました。そんな事があったその人も制裁をおそれて「本当の事を云いますから姉さんによるしく伝えて下さい」と伝言して名乗りでたらしいですが、何という人だったか名前すら聞いていませんでした。

仲吉良光先生

収容所にいた頃、私達のめんどうをなにくれとなくみて下さったのが、日本復帰をまっ先にとなえられた仲吉良光先生でした。仲吉先生も首里市長をされていたのですが、私達と同じ様に知念でク捕虜クになり、そこで人が避難民の世話をされていましたが、廃墟と化した首里に一日も早く人が住める様にしようと運動をされました。この仲吉先生とは戦争前、私が女子青年団の団長をしていた

遺骨があり、それは家の中、壕の中、井戸の中にもいった具合で何をするにしても大変でした。私達が先発隊だから一生けんめい働いて、皆を首里に呼び寄せる様にしなくてはとがんばりました。男は家を作る為の木を岡頭あたりまで伐採に出かけていました。

私はけがをして余り重労働も出来ないで千原先生と馬場さん（末吉宮のお坊さん）に相談して自分の治療をしながら病院で看護婦として働いていましたがその頃から皆統々と首里に帰って来ていました。その人達の中で看護婦資格のある人に仕事をゆずりました。私は看護婦の資格もなかったし、第一、病院にいては食糧も余りなく、母と子供の食糧を何とかしなくてはと思い配給所にまわしてもらいました。

配給所勤務

配給所とはアメリカ軍が戦争が終っていらなくなったもの、たとえばフトン、カヤ、洋服、道具、食糧などをトラックでもってきてくれるのを倉庫にしまって皆に分配していたところです。

その配給所で働いている時の事でしたが、友軍の使っていたトラックをくみだてたボロ車で糸満に行つての帰り、真玉橋あたりで黒人の車と白人の車の二台からおわれたのです。こちらは男四名に女が四〜五名ものっていました。二台の車とも私達が何も出来ないのを知っていて、追跡してくるのです。もう最後はとびおりようと思いましたが、どうなる事かと恐くてしかたありませんでした。アメリカ人同士が意地をはりあつてずつとおいかけきていましたが、その内黒人の車がびたりくっついて車から車にまたごえ

頃、奉仕作業の一つとしてリゅうたんの池の掃除をしていた時におしゃべりでめだつ存在の私を見てよく話かけてくれましたので知っていました。後になって首里に戻れる事になり「首里に戻れたのも先生のお陰です。ありがとうございます」とお礼を申し上げたところ「首里に帰れたのは問題じゃないよ、この沖繩が日本にいつかえられるかが心配だ」と云われたが、沖繩が本土から切り離されてるとは夢にも思わなかった私には変なことをおっしゃるもんだと思いました。

首里先発隊

この久手堅には相当長い間住みました。その間には本当にいろいろの事がありました。家といっても米軍がいらなくなったテントをもらったり、海で流れてくる板ぎれを拾ったり、ふとんさえすててあるとひろってきたりで何もかも利用して生活していましたし、お風呂もなく井戸のまわりに集まって、男も女も区別なく皆裸で水あびしたり洗濯していましたが、米兵などはこの様子にびくりしていました。

作業している私達に悪ふざけする米兵をけいかいして鐘をカンカン鳴らしたりして用心しました。ここで台風にもあい一部屋に六〇名位もおしこめられておろかさなる様にしてねるという事もありました。その頃、仲吉先生をはじめとして首里に帰る運動をされた人達の願いがかなって首里先発隊が編成され、私もその先発隊の一員として首里に帰る事になりました。その首里も焼け野が原で何もなく本当に見るかげもない程の荒れ様でした。首里のどこにいても

してきたので、大きわぎになりましたが、助手席ののっていた男の人が気転をかかしてふいた指笛に、その黒人兵はMPにつかまると大変と思ったのかどうか、離れていったので、命びろいしました。この配給所では男と同じ様な重労働をしていたので、身体を悪くしてしまい、とうとうたおれてしまいました。その時ちょうど部長、課長など上の人に行なっていた特配の件で配給所に働いていた人達が次々警察に呼ばれて「一般の人の配給物を上役達に特配するとはけしからん」と叱られたりしました。皆んなは警察でしらべをうけたとワーワー泣いていましたが、私は悪びれずに何んでも云って平気でした。その配給所も人員整理があつたり、又例の特配の件のトラブルでうるさくて軍作業の方に交りたいと思っていました。

軍作業生活

当時の軍作業に出ている人は皆多少にかかわらず「戦果」をあげていたので、私も母と子供を養うには配給所よりゆとりがある軍の仕事をしたと前々から思っていましたので、まずは家を何とかしなくてはと、そろそろ大名の屋敷に行つては住める様に準備しました。母と子供は作業に出てもらえず赤平の規格家において、自分はカヤ刈り作業に出はその昼の一時間の休みの間に、壕に入れてあつた薪をかっついてせつせと働きました。その内、労働課長をしていた名嘉山兼助さんの世話で軍の作業に出る様になりました。最初は水道工事の為の穴掘りで、トラックののって、ライカムや垣花あたりにてていましたが炊事の仕事に変わる様になり、ウェイトレスもし

ましたが、朝早く夜の遅い仕事で子供と過す時間もなかったので父のいない子供の事を考えるとふびんで、学校に入る頃にメイドの仕事に交りました。

私が軍の仕事をする様になって食物には全然不自由しませんでしたし、時々アメリカ兵の洗濯をしたりしてたばこをもらったりしましたが、ある時、そのもらったたばこをゲートでみつかった事がありました。自動車を運転していた人に、あげるからと渡したところをみつかってしまいました。その運転手に妻や子供がいてやめさせられると悪いと思い、「私のです」と名乗りで取り調べ事務所に連れていかれ、アメリカ人の取り調べ官に訳をいっただので、直ぐ帰ってよろしいと云われホッとしましたが、もう帰宅用のバスもなかったで、「あんた達が私をここに連れて来たのだから車で送ってほしい」といいましたが、当時は、皆アメリカ兵にそんな口をきく人も少なかつたのでしょうか、その事務所働いていた沖繩の人もびっくりして大笑していました。私の事を心配してくれていた近所の人達より先に家について皆をおどろかせました。

もうメイドをしてからでも何十年になりますが、今では娘も結婚して孫まであるし、毎日が楽しく、幸せだと思っています。自衛隊が沖繩に入って来ているいろいろの話を聞いたりすると、やはりあの悲惨な思い出がよみがえって来て不安になります。

あの戦争だって本土をまもる為にとこの小さな沖繩に兵隊が一杯入ってきて、その為にあんなにも激しい戦いになったのですから、そしてこの私だって戦争さえなかったら主人と不自由なく暮せただろうし、ケガもする事なく又あんなにみじめな思いをしたり見た

りする事もなかったのにと自分をふり返ってみるといつも、戦争の一番の被害者は女だと思っっているのです。

総

説

安仁屋

政

昭